

<前編>

(効果音) (小鳥の声)

新藤美奈 いい天気だね。

姉 尚 そうね。信君も美奈も久々の外出だから、今日は公園まで行ってみようか。きつときれいだよ。

西川信 公園かあ。やったあ。あそこだと、町も遠くの山も全部見えるんだ。

美奈 うん。葉っぱも黄色になったり、赤くなったりしてるんだろうな。美奈、その葉っぱでね、押し花を作るんだ。クラスの友達にあげるの。

尚ナレーション 美奈の元気な言葉を聞いて、わたしはにっこりと笑顔を返した。わたしの名前は新藤尚。大学2年生。はしゃいでいる2人は妹で小学3年の美奈と、小学5年の西川信君。そう、2人は、まだあんなに若いのに、骨髄と腎臓^{じんぞう}のガンに冒されていた。今日は、まだ体力のあるうちに、楽しい思い出を残してあげようと、医師の許可を得て公園へピクニックに行くことになったのだ。あの残酷な診断が下された3か月前の8月のあの日を、わたしは決して忘れられない。

(音楽) (悲しい感じ)

医者 お母さん、お姉さん、よく聞いてください。美奈ちゃんはガンです。それも末期なので、手の施しようがないと言っていいでしょう。もちろん最善は尽くしますが、

母 ガンって…。

尚 先生。美奈はまだ小学3年生です。何で美奈が…。

母 あとどのくらい美奈は生きられるんですか？

医者 半年…、長くても1年ですね。

ナレーション そのご、どのようにして家に帰ったのかは覚えていなかった。その日から、母とわたしの病院通いが始まった。

母 美奈、今日はお前の好きなパイを作ってきたからね。

美奈 うん、ありがとう。でもね、パイも好きだけど、美奈、学校の方がもっと好き。いつになったら学校に行けるのかな。

母 そ、そうね。もうちょっと元気になって痛いのがなくなったら、先生が行ってもいいって言ってくださるんじゃないかしら。

美奈 うん、分かった。美奈、頑張る。

ナレーション けなげに言う美奈の視線を避けるように、母はそっと部屋を出て行ってしまった。母が出ていくと、美奈はポツリとわたしに尋ねた。

美奈 お姉ちゃん。美奈、悪い病気なの？

ナレーション 突然の質問にびっくりしたわたしは、とっさにこう答えていた。

尚 何言ってんの。美奈はぴんぴんしてるじゃない。悪い病気だったらパイなんて食べられないんじゃないの？

美奈 (笑いながら) そうだよ。よかった。

ナレーション 美奈の安心した顔を見て、ウソをつきとおしてでもガンのことは美奈に悟られないようにしよう、とわたしは決心した。そんなある日、1人の男の子が入院してきた。

看護婦 今度この部屋に入ることになった西川信君です。仲良くしてね。

信 よろしく。僕、5年生なんだ。

美奈 わーい。お兄ちゃんだ。わたしね、前からお兄ちゃんが欲しいなって思ってたんだよ。

ナレーション この日から、新しい風がわたしたちの病室に入ってきた。美奈も今まで以上に明るくなり、何かあると“お兄ちゃん”と言って、信君のそばに行くようになったのだ。

美奈 お兄ちゃん。

信 僕、寂しくないよ。だって神様がいっしょだもん。

美奈 神様？

信 そうだよ。いつも僕と一緒にいてくれるんだ。

美奈 ふーん。

信 美奈ちゃん。神様と一緒にだとね、痛い注射とか、苦い薬も我慢できるんだよ。

美奈 え、ほんと？

ナレーション 信君はその無類の明るさで、看護婦さんにも好かれていた。

信の父 信はガンなんです。本人には言ってないのですが、すでにあの子は自分の病気を知っているようです。

母 そうですか。あんなにちっちゃいのに、何て立派なんでしょう。わたしなんか、今もまだその事実を受け止めきれていないというのに

ナレーション そう言った母の目に涙が光っていた。わたしはますます信君のことが知りたくなった。なぜそんなに強くなれるのか。何が信君をそうさせているのか。

(音楽) (ブリッジ。回想終わり)

ナレーション こうしてわたしたち家族は、ピクニックの日を迎えた。もう、小さい2人は長く歩くほどの体力はなかったため、車イスで行くことになった。

信 気持ちいい風だよ。

母 そうね。もう秋になるからね。

信 風ってね、すごいと思うんだ。

美奈 何で、お兄ちゃん？

信 だって、目に見えないのに、周りのもので、今風が吹いたって分かるだろ？

信の父 そう言えばそうだな。

信 神様、イエス様もそうなんだ。
ナレーション 不思議なことを言う子だと思った。そんなこと、考えたこともない。
信 僕ね、夜怖くなったとき、いつも歌うんだ。もちろん大きな声では歌えないんだけどね。
尚 へえー。何ていう歌？
信 「王の冠」。
母 あら、おばさんは知らないわ。どんな歌？
ナレーション 信君はゆっくり立ち上がると、大きな声で歌いだした。
信 (力いっぱい歌う) ♪さあ 僕らの戦い終わったら/ 冠が待ってるよ/ さあ 僕らの戦い終わったら、天のみ国で/ 受けよ 受けよ 義の冠/ さあ、僕らの戦い終わったら 天のみ国で
ナレーション 信君の声は、真っ青な青空の向こうまで昇っていくようだった。(間)ピクニックに行ったあとの 2 人は、しばらくの間動くことができなかった。確実にガンが進行していることの証拠だったのだ。
美奈 お兄ちゃんね、昨日も頭が痛かったんだって。苦いお薬も飲んで、痛い注射も頑張っているのにな。
尚 かわいそうだね。でも信君頑張ってるもんね。
美奈 そうなの。すごいんだよ、お兄ちゃんて。動くのに大変なのに、毎日大きいお姉ちゃんのところに行ってるの。
尚 大きいお姉ちゃんて？
美奈 ほら、お兄ちゃんの前の部屋にいる高校生のお姉ちゃんだよ。看護婦さんが来ても全然しゃべらない人。
尚モノローグ この子は何でこんなことができるんだろう。
ナレーション わたしの信君への興味と疑問は日に日に強まっていったが、一方では、やはり心配なのは美奈のことだった。最近は痛みがひどく、必死に耐えているようだ。
医者 美奈ちゃん。今度の注射はちよつと痛いかもしれないけど、頑張るんだよ。
美奈 先生、大丈夫だよ。美奈、注射なんて全然痛くないもん。
医者 そうか。じゃあ頑張ろうね。行くよ。
美奈 (間)うっ。
医者 よーし、よく頑張った。これでもっとよくなるからね。
美奈 ほんと？ じゃあよくなったら学校行ってもいい？
医者 そうだね。じゃ、頑張ったご褒美に連れて行ってあげよう。
美奈 やったー！ ね、先生、いついつ？
医者 うーん。明日にしようか。
美奈 わーい！
ナレーション 美奈は本当にうれしそうだった。

美奈 お兄ちゃん。美奈、明日学校に行けるんだよ。

信 (苦しそうに)そっかぁ。よかったね、美奈ちゃん。

ナレーション そう言った信君は苦しそうだった。次の日、約束どおり美奈は、病院の車で学校に行った。学校に着くと担任の先生が出迎えてくれた。

担任 美奈ちゃん、お帰り。先生のこと、覚えてるかな？

美奈 うん、覚えてるよ。

医者 あの、あんまり長くはられないので…。

ナレーション そういう医者の言葉に促されるように、先生は美奈の車イスを押して教室に行った。みんなが授業をしていたので入ることはできなかったが、懐かしい友達に手を振っていた。そして、前もって書いてあったみんなからの寄せ書きをもらい帰ろうとした時だった。運転手さんの携帯電話が鳴った。

運転手 はい、もしもし、はい、分かりました。すぐ帰ります。先生、病院からです。すぐ戻りましょう。

尚モノローグ もしや信君の身に何か？

ナレーション わたしたちは不安な気持ちを抱いて病院へ急いだ。病室でわたしたちの目に飛び込んだのは、空っぽになった信君の白いベッドだった。その日、信君の小さな命は、この世を去った。

<後編>

尚モノローグ なぜ、なぜ信君が…。

ナレーション 何だか、暗やみの中の小さな光が消えたような気がした。

信の父 今までありがとうございます。あ、これを美奈ちゃんに渡してください。信から預かったものです。まだ元気なときに書いたようです。

ナレーション そう言って信君のお父さんは、1枚の封筒を差し出した。

美奈 ねえ、お姉ちゃん。お兄ちゃんはどこに行ったの？ 病院のどこを探してもいないだよ。せつかく学校に行ってきた話をしようと思ったのになぁ。

尚 信君はね、病気が重くなったから別の病院に行ったんだ。

ナレーション わたしは、ウソをついてでも、美奈に死の恐怖を味わわせたくなかったのだ。

尚 はいこれ、信君から手紙だよ。

美奈 わーい。

尚 何て書いてあったの？

美奈 僕も頑張るから、美奈も頑張れって。

ナレーション 信が亡くなってから、2週間があつと言う間に過ぎた。美奈は、車イスから降りても、今では2、3歩しか歩けなくなっていた。日に日に死へと近づいている美奈を見るのは、胸が張り裂けそうなくらいつらかった。

美奈 ねえ、お母さん。美奈、行きたいところがあるんだけど。

母 あら、どこかしら？

美奈 教会。

母 教会？ 何でまた教会なの？

美奈 お兄ちゃんが行ってたから。美奈も一度行きたいなって思ってたの。

ナレーション わたしたちは病院の外出許可を取り、次の日曜日、初めて教会に行くことになった。隣に座っている女の人の顔を見て、美奈もわたしも驚いた。

美奈 あ、大きいお姉ちゃん！

ナレーション 紛れもなく彼女は、信君が特に親しく話し掛けていた、高校生の佐山浩子さんだった。

美奈 お姉ちゃんは何で教会行こうと思ったの？

浩子 それはね、信君に誘われたからよ。

美奈 じゃ、美奈と一緒にだ。

浩子 ほら、わたしはみんなとしゃべらなかつたでしょ？ でも信君だけは毎日嫌がらずに話し掛けてくれた。そして神様のことを教えてくれたの。「僕の神様はお姉ちゃんとも友達なんだよ」って。さあ、牧師先生の話が始まるよ。

牧師 皆さんは、今どんな悩みを持っているのでしょうか。お友達のことですか？ それとも自分のことでしょうか。人はその悩みを自分で何とかしなければと思ってしまいますよね。それでもなかなか解決できません。むしろだんだん苦しくなる。でもこの本、これは聖書というのですが、この聖書の中にはこんなことが書いてあるのです。「空の鳥を見なさい。種まきもせず、刈り入れもせず、倉に収めることもしません。けれどもあなたがたの父がこれを養ってくださるのです。」この父とは神様のことです。小さい鳥をも養ってくださる神様は、皆さんのことも養ってくださいます。だから心配しなくてもよいのです。

ナレーション 初めて聞いたお話だけど、何か慰められるような気がした。わたしたちは集会が終わったあと、牧師さんと話をした。

牧師 美奈ちゃんには、今日のお話、難しかったかな？

美奈 ちよつと難しかったけど、神様が守ってくれるんだから心配しなくていいってことでしょ？

牧師 うん、よく分かったね。

母 先生。もしその悩みが絶対によいほうに行かないときに、やっぱり心配しますよね？

牧師 そうですね。わたしたちは思っていることがよいほうに行かないと、悩んでしまうんです。でもわたしたちにとっては嫌なことでも、神様から見てよいことってあるんですよ。理解するには難しいんですけどね。

美奈 ねえ先生。いい子だったら天国に行ける？

ナレーション 美奈の突然の質問に、わたしたちはぎくりとした。しかし牧師さんは優しく答え

てくれた。

牧師 神様を信じないと、天国には行けないんだ。なぜかって言うとね、わたしたち人間の心の中には、意地悪とか盗みとかウソとかの悪い心があるからだよ。でも神様を信じると、自分の中にある悪いことが分かってくる。神のただ一人の子であるイエス様が、その罪を許すために、自分の命を捨ててくださったということが分かってくる。すると素直に、「神様、ごめんなさい」って言えるようになるんだ。そうしたら、神様が美奈ちゃんの心の中にちゃんと入ってきてくれるよ。

ナレーション この日から、美奈はどうとうベッドから起きられなくなった。抜け落ちた髪の毛を隠すキャップをかぶったままの美奈の顔は、不思議なことに、日に日に、何か透き通ったような輝きを見せてきた。そう思っていた矢先、美奈の容体が急変した。

母 美奈ちゃん、しっかりね！

尚 美奈、頑張れ！

ナレーション しばらく苦しうだった美奈は、ポツリとつぶやき始めた。何かを歌っているようだった。

尚 何？ 美奈、何て言ってるの？

美奈 ♪さあ 僕らの戦い終わったら… 冠が… 待ってるよ。さあ 僕らの戦い終わったら… 天のみ国で…。

ナレーション その時、駆けつけた牧師さんがこう言った。

牧師 美奈ちゃん、神様を、イエス様を信じますか？

ナレーション その呼びかけに、美奈はほほ笑みながらこつくりと小さくうなずいた。これが、美奈の、短い地上の命の終わりだった。

(音楽) (天国への憧憬)

ナレーション 美奈は最後に手紙を残していた。「お母さん、お姉ちゃん。今までいっぱい楽しいことをしてくれてありがとう。(途中から美奈の声で)

美奈 美奈は信お兄ちゃんのところに行きます。美奈のためにウソついてくれてありがとう。でも美奈は治らない病気だったの。とはすごく悲しかったけど、今はイエス様と一緒に寂しくありません。お母さんもお姉ちゃんも、イエス様信じて天国に来てね。待ってます。美奈。」

ナレーション わたしは、病室から澄み渡った空を見上げた。スーッと涙がほおを伝わった。

尚モノローグ (涙声で) ♪さあ 僕らの戦い終わったら… 天のみ国で…。美奈、ウソついてごめん。でも美奈は、知ってたんだね。何もかも知ってたんだね…。

ナレーション その時、わたしは、無性に天国が恋しかった。信君と美奈の待っている天国に行きたかった。

尚モノローグ わたしも、変わらなければ…。

ナレーション 一心の中で、わたしはそうつぶやいていた。

(完)